

## 高浦忠彦先生の人と学問

北 島 治

### 1 高浦先生の研究姿勢・「原典主義」

私が立教大学に入ったのは大学院博士課程後期課程からであり、そのため高浦忠彦先生と私が初めてお会いしたのは、先生が大学院で担当されていた「管理会計特論」の最初の授業時であった。私の大学院の指導教授は管理会計を専門とされた故敷田禮二先生であったが、同じ専門分野の研究者である高浦先生は、実質的に敷田先生と並ぶ私の大学院時代のもう一人の指導教授であった。それ以来20数年以上にわたって、高浦先生には、研究の面はもとより、私の結婚式の仲人をしていただくなどプライベートな面でも大変お世話になっている。以下では、これまでの先生との交流を通して私が知っている高浦先生の人柄や学問研究に関することを紹介したい。

高浦先生は、1965年3月に早稲田大学第一商学部を卒業され、早稲田大学大学院商学研究科修士課程・博士課程で会計学・経営学などを研鑽された後、関東学院大学経済学部助手、同専任講師、同助教授を経て、1978年4月に立教大学経済学部助教授に就任された。それ以来、2007年3月に定年退職されるまでの29年間にわたり、立教大学経済学部で研究と教育に多大な貢献をされてきた。学部では「管理会計論」「簿記」「ゼミナール」などを担当されて、多くの有為な人材を社会に輩出されている。また、大学院で担当された「管理会計特論」では大学院生に対する真摯で熱心な指導を通じて多くの研究者を育成されている。

ところで、高浦先生は、どちらかというと言数が多き方ではない。研究会や会議などでも自分が確実に理解していること以外はめったに発言されることはない。先生のこのような言行は、先生の頑固ともいえる徹底した「原典主義」という研究姿勢から来ているように思われる。

この「原典主義」の基本的な研究姿勢については、先生ご自身が、その著書『資本利益率のアメリカ経営史』（中央経済社、1992年）の「はじめに」の中で、「本書では、できるだけ、原典主義を心がけた。つまり、可能な限り孫引きは避け、権威者がどう言おうと、原典に直接目

を通し、自分の頭で考える、と言う態度を堅持したつもりである」(4ページ)と記述されている。すなわち、先生の基本的な研究姿勢は、可能な限り徹底して一次史料に依拠しようとする「原典主義」であり、さらにこれに基づいた「反権威主義」の姿勢も併せて貫いておられる。この点は、経営史研究の世界的権威者であるチャンドラー(Alfred D Chandler Jr.)氏や、チャンドラー氏の影響を色濃く受けてアメリカ管理会計史を展開するジョンソン(H. Thomas Johnson)氏の研究に対し、入手可能な一次史料を駆使して、経営史や管理会計史の権威者である彼らの見解の再検討・批判を行っておられることによく現れている。

先生によれば、原典主義という研究姿勢は、大学院時代の恩師である古川栄一氏や古川氏を中心に結成されたFKK(古川栄一経営研究会)の諸先輩によって鍛えられ、また関東学院大学の小林正彬氏をはじめとする経営史学会の諸先輩などからオリジナル・データ(例えば、マニスクリプト)の重視を学んだとのことである。先生のこのような原典主義の姿勢を貫徹されようとしたことをよく示すエピソードを紹介すると、先生は、1976年に在外研究の機会を得られてアメリカに渡られたとき、デュポン社創業者一族の一人であり、その関係からデュポン社の種々の原史料をほぼ独占保有していたチャンドラー氏の研究室を訪れて、デュポン社の原史料そのものの閲覧を許可するよう交渉したこともあったそうである。

## 2 高浦先生の研究業績

先生は数多くの研究業績を残されているが、それらは大きく3つのグループに分類することができる。1つは、先生の研究の中核をなすもので、資本利益率に焦点を当てたアメリカ企業の財務管理史・管理会計史の研究であり、2つめはその展開形態であるコーポレート・ガバナンスの研究であり、3つめは日本企業を対象とした三菱財閥の研究である。

### (1) 資本利益率の研究

財務管理や管理会計における重要概念である資本利益率の研究の集大成は、前掲の『資本利益率のアメリカ経営史』に結実している。そして、この著書をベースにした研究で、先生は1999年3月に博士(経営学、立教大学)の学位を取得されている。

『資本利益率のアメリカ経営史』は、19世紀以降から1980年代までを対象に、ニューイングランド綿業企業(例えば、ボストン工業会社)、ジョンソン社(デュポン社の近代的管理の源流とされる会社)、デュポン社、食肉加工企業(例えば、アーマー社)、ジェネラル・モーターズ(GM)社といったアメリカ企業を素材に、営業報告書をはじめとする数多くの一次史料を駆使して詳細に分析し、資本利益率概念の生成・発展、および資本利益率が財務管理あるいは価格設定に果たしてきた意義について実証的にまとめられた貴重な歴史研究の労作である。おそらく、本書は、アメリカ経営史や会計史の研究を行う人にとっては必読の書の1つといって

もよいだろう。

先生によると、資本利益率の研究の出発点となったのは、1972年～73年に発表された「GMの価格設定——財務管理史の一視角——」(1)(2)（『経済系』第94集，第95集。『資本利益率のアメリカ経営史』第5章に所収）であり、この論文によってその後の研究の方向性を見出し、約20年かけて著書としてまとめられたということである。また、この研究を進める上で、アメリカへの2度の在外研究（関東学院大学在職時の1976年4月～9月の半年間の在外研究、および立教大学移籍後の1981年4月～1982年3月の1年間の在外研究）は決定的に重要な機会であったようである。1回目の時には主にデュポン社の関係史料を、2回目の時には資本金利益率に関係する史料を収集し、それらの詳細な分析がその後の研究成果へと結びついている。

先生の資本利益率に関する歴史研究は、前掲著書で残された課題を追って、最近では2つの方向に進んでいる。1つは、より現代に近づく方向の研究で、後述するコーポレート・ガバナンスと資本利益率に関連した研究である。もう一つは、より古い方向への研究で、1830年代以降のアメリカ公益企業とくに鉄道業における料金規制と資本利益率との関連についての研究である。

なお、先生がなぜ「資本利益率」を研究対象にされたのかについては、次のようなことを言われていた。すなわち、先生の最初の論文である「経営学方法論に関する一考察——山本安次郎教授理論の理解のために——」（『商経論集』第16号，1969年5月）では、いわゆる行為の主体存在論の解明を行ったが、それを経てより具体的に管理方法の「経済的基盤」の解明に向い、さらに「経済的基盤」分析を産業レベルにも具体化して史実を追う過程で、原価計算から資本利益率に対象を変えていったということのようである。

## （2）コーポレート・ガバナンスの研究

先生は、前掲の『資本利益率のアメリカ経営史』の最終章である第6章「1980年代のGMと資本利益率」で、資本利益率を中心とする財務管理技術を駆使する財務管理部門が中核を占め、製造機能を弱体化させる結果となった企業を「財務管理主導」型企業という概念で捉え、これと機関投資家の反乱との関連を解明されているが、この研究を基礎にして、その発展としてコーポレート・ガバナンスの研究に進まれている。

そのきっかけとなったのは、1998年の経営史学会第34回全国大会において、統一論題「コーポレート・ガバナンスの歴史と展望——日本企業を中心に——」のオルガナイザーとして問題提起の役割を担われたことである。その後、「GMとコーポレート・ガバナンス——ステムベル会長辞任を中心——」（『立教経済学研究』第54巻第1号，2000年7月）という論文をまとめられ、コーポレート・ガバナンス研究を本格的に開始され、最近では「アメリカ法律協会『コーポレート・ガバナンスの原理：分析と勧告』前史の研究」（『立教経済学研究』第58巻第4号，2005年3月）がそれに続いている。今後、アメリカ大企業のコーポレート・ガバナンス運動と

資本利益率あるいは利益指標の発展との相応関係の分析を展開される予定と聞いている。

### (3) 三菱財閥の研究

先生の管理会計史の研究は、アメリカ企業を対象とするものだけでない。『三菱鉱業社史』編纂に関係されたことがきっかけとなって、三菱財閥系企業を対象とした日本企業の会計実践の史的研究も行っておられる。この研究は、「三菱の『社則』について」(『経済系』第101集, 1974年10月), 「明治期における鉱山業の原価計算——1897(明治30)年三菱合資会社佐渡鉱山の事例について——」(『経済系』第108集, 1976年6月), 「初期鉱山会計に関する一考察——尾去沢金鉱の事例について——」(古川栄一先生古希記念論文集『現代企業の基本問題』同友館, 1984年に所収), 「明治期・高島炭坑の会計」(西川純子・高浦忠彦編著『近代化の国際比較』世界書院, 1991年に所収)などの論文として公表されている。

先生は、三菱財閥系企業の会計史研究でも原典主義の姿勢を貫かれており、岩崎弥太郎・岩崎弥之助伝記編纂会や三菱総合研究所に所蔵する三菱財閥系企業の一次史料を使った詳細な分析が行われている。なお、三菱財閥の研究は、先生が関東学院大学に在職されていた時期が中心で、最近は一時的に中断された状態にある。

## 3 高浦先生のひととなり

当然ではあるが、先生は、授業や研究会、学会などの教育や研究の場では、時に厳しい面を見せられることがある。しかしそれを別にすると、先生は非常に温厚で包容力のある人柄である。その人柄を反映してか、同業の研究者はもとより、学生やそれ以外のいろいろな人とも広範な交流があり、それを非常に大切にされている。

例えば、学生との交流という点では、毎年正月に学部ゼミ生をご自宅に招待されるのが恒例になっている。さらにこのゼミ生招待日とは別の日に、大学院生や卒業生もご自宅に招待されている。私も大学院生の頃に何度も先生宅を訪問している。また、普段でも、授業や研究会が終わった後、しばしば先生から酒と肴の美味しい店に誘われ、最終的に先生にご馳走していただくことが頻繁にあった。今でも学会や研究会などで先生とお会いしたときは、必ずといってよいほど夜の酒席に誘われるが、その際に先生と話をしていると院生時代に戻った気分になれる。

ところで、私の知る限り、先生は山登りと魚釣りという自然志向の趣味をお持ちである。山登りは学生時代からされており、日本全国いろいろな山に行っておられるようである。しかも、愛妻家の先生は奥様と一緒にご夫婦で山登りをされることがよくあると聞いている。数年前にお会いしたときにはご夫婦で大雪山に登られた話を聞いた。

また、魚釣りにもよく行かれていたようである。先生がよく行かれていた池袋の小料理店の

主人などと一緒に三浦半島方面で魚釣りをされた話は昔先生からよく聞いた。しかも、その釣果のいくつかは魚拓にしてご自宅に飾ってあった。また最近聞いた話では、佐渡島に行って魚釣りをされているようである。私も院生時代に一度だけだが、先生から誘われて、先生の学部ゼミの企画の魚釣りに同行させていただいたことを思い出す。

末筆となったが、高浦先生には、どうかご健康に留意され、これからも研究者として教育者としてまだまだご活躍いただきたい。こう願うのは私だけではないだろう。